

2020年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第二十六主日(収穫感謝)礼拝
「隠された言葉」ルカ福音書第18章24節から34節

【聖書】

ルカによる福音書 18:24 イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26 これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言うと、27 イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。28 するとペトロが、「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と言った。29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、30 この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

18:31 イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。32 人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。33 彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」34 十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。

1 どうして隠されたのか？(導入)

先程、第18章の24節から34節をお読みしました。今日の聖書テキストの前半、主イエスの周りには、多くの群衆がいたのだと思います。群衆は、幼子達を側に呼び寄せ祝福してくださったり、「金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しい」「人にはできなくても神はおできになる」と語られる主イエスに、深い感銘を受けたのではないのでしょうか。そして、神の御支配が主イエスによってやってくるに違いないと喜んで、自分達の家に戻って行ったのだと思います。そして、弟子達だけが主の周りに残ります。31節、主はその中から、十二人をみ側に呼び寄せました。この十二人は十二使徒とも呼ばれ、主が特に選んだ人々です。主が彼らを選び出した時の様子を、ルカは以下のように記しています。「イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。」(ルカ6:12～13) 主イエスの夜を徹した篤く切なる神への祈りに支えられた十二人。その彼らに主が語られたのは、エルサレムでイエス様が迎える非業の死と三日目の甦りの予告、ご自身が受けねばならぬ苦難と栄光の予告でした。

特別な十二人を呼び寄せご自身の受けるべき苦難を告白した時の主イエスの気持ちを思う時、34節の言葉は衝撃的です。「十二人はこれらのことが何も分からなかった。」主イエスが、「この人々にだけは知っていてほしい」と願った十二人であった筈。ですが、彼らは、主イエスの言葉を何一つ、全く理解できなかったのです。何故なのでしょう？「彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。」この言葉の意味を弟子達に隠したのは誰でしょうか？聖書では主語がない場合、神の業を示す事が多いようです。十字架と復活の意味を、天の御神が弟子達に隠されたのではないかとルカは暗示しているようです。

ですが、彼らが、この時点で、主の十字架と復活予告を理解したとしたら、主イエスはどんなに慰められ、励まされたでしょうか。愛し抜いた弟子達が、十字架を前にした自分と心を共にしてくれれば、主イエスの孤独は、少し和らいだのではないのでしょうか。弟子達も、頼みとしていた主イエスが十字架で殺された不安で心を悩ませることもなかったでしょうに。どうして、天の御神は、この主の言葉の意味を隠してしまわれたのでしょうか。

2 罪人である私達(本論 I)

その理由の一つは、十二弟子達が自分達自身の真実の姿に気づく為ではなかったか、と思います。自分自身の本当の姿とは何でしょうか？人間は自分自身を完全に客観的に観察する事はできない、どうしても主観が入ります。さりとて、他の人間が、別人格の存在を隅々まで知る事も不可能です。

親子であれ夫婦であれ、相手の事を全部知る事はできません。しかし、「人間にはできないことも、神にはできる」、人間をお造りになった天のみ神お一人が一人一人の真実の姿をご存じなのだと思います。

神さまから見た真実の姿とその人自身が考える姿は随分と異なるでしょう。主イエスの最もお側近くにいて、主の言葉を聴き、行いを見て来た十二人も、そうだったと思います。彼らは、社会的に尊敬されているファリサイ人や律法学者達だって、実は自分達の行いを誇り、傲慢になり心の中では神に従いきれていないという事をイエス様を通じて気づかされていたのだと思います。「けれど、全てを捨てて主に従ってきている自分達は、ファリサイ人や他の人々とは違う、神に従う者であって、罪人ではない」、十二弟子達の心の中には、そのような考えがあったのだと思います。

この弟子達の思いは、私達の内にもあるのではないのでしょうか。私達は、自分を過ち多い者、間違った事をする罪人だと考えたくありません。しかし、その一方で、「あの人は罪深い」と他者を断罪する事には、ためらいも覚えません。日々報道される事件について、犯罪を犯した人々を「悪党は懲らしめね

ばならない」と糾弾する事もしばしば。そうして他者を弾劾しつつ、自分達が一段上等な人間になったような気がする、そういう心は私達の多くにあるように思うのです。その時私達の心を支配しているのは、「あんな罪深い人間と自分は、根本的に違う人間だ」という考えではないかと思うのです。

しかし、本当にそうでしょうか。「異端の鳥」という映画があります。試写会では、あまりに残酷すぎる内容に耐えかねて、途中退場者が続出したという問題作です。舞台は、第二次世界大戦中東ヨーロッパのどこかの国。ナチス・ドイツのホロコーストを逃れて地方に疎開した少年は、預かり先である1人暮らしの叔母が病死して行き場を失い、たった一人で旅に出ることになります。彼はゆく先々の土地に住む「普通の人々」から、繰り返し目をそむけたいくなるような虐待を受けます。この映画で描き出されているのは、普通の人々の罪です。象徴的な「異端の鳥」という題名は、映画の中の場面に由来します。少年が出会った鳥売りの男は、籠から一羽の小鳥を取り出し、ペンキを塗って空に放つ。小鳥は上空を舞っていた鳥の群れに合流しようとはしますが、異なる見かけになってしまったため他の鳥たちから攻撃され、無残な姿で墜落します。この少年は金髪で青い瞳、一見してその土地の住民であるスラブ民族とは異なります。見た目が異なるという理由で、彼は、いじめ、虐待、暴力の標的になります。戦時下という緊張した状況の中、外見や思想信仰が違う異物を、徹底的に差別し排除する、どこの国でも起きている人間の罪を、「異端の鳥」は冷徹に描き出しています。そして最も恐ろしい事にそんな仕打ちを受けた続けた少年もまた、加害者となっていきます。

現代日本に生きている私達は、「異端の鳥」に出て来る人々とは決定的に違う、私達はそんなにひどい事はしない…とは言えないと思います。関東大震災の時、太平洋戦争の時、今から数十年前の普通の日本人は、被差別部落の人々や朝鮮半島出身者に残虐な行いをしたという記録が残っています。どこの国でも戦争時などに見られる人間の罪です。そして、それは戦時下だけではありません、私達が造る社会は、今も静かに人を殺し続けている現実があります。日本の自殺率は先進主要国の中ではトップだそうです、日本特有の現象として、不況になると自殺率がはね上がるという事があるようです。今もコロナ不況で自殺者が増える事が心配されています。つまり、私達は、富や地位がないと生きていけないと多くの人々が考える社会を作り出してしまっているという事です。経済的弱者を、自己責任という名のもとに死の絶望へと追いやる社会、それは、私達一人一人の在り方と無関係ではないと思います。私達人間は、よい状況の時はお互いに大切にし合い、愛し合う事もできます。しかし、戦争や大不況、大災害などの自分達を取り巻く状況が困難になると、順調な時と同じように尊敬しあい愛し合う事は難しいこと。「自分達のものを奪いそうなよそ者は排除しろ！」と憎しみや敵意にとらわれてしまう。

ましてや自分を苦しめる敵を愛する事など到底できる者ではありません。自分達を正義とし、異なる者を排斥する、驕り高ぶった私達の姿があります。

そして、このような在り方は、私達全ての命を造られ、「かけがえのない良い命だ」と喜んで愛してくださる天の御神からすれば、罪の姿。神がご覧になれば胸をかきむしられるほどに悲しまれる、それが私達の現実であり、真実の姿です。

そして、神を神とせず、自分達を神として驕り高ぶって生きる私達は、神と無関係に滅んでいくしかありません。それは、今日の聖書テキストで主イエスの最後の様子が、六つの言葉を重ねて強烈に描かれている事からわかります。「引き渡されて」、「侮辱され」、「乱暴な仕打ちを受け」、「唾をかけられる」、「鞭打つ」、「殺す」。これは、私達人間が迎えなければならない「死」の現実を現わしているようです。いくら医学が発達しようとも、私達、死を避けて通る事はできません。死の力は強大。私達が死にゆく時、この世の富も名誉も、人間関係もなんの助けになりはしません。圧倒的な死の力により、乱暴に貶められ、痛めつけられ、ねじ伏せられて、命を奪われます。助けてくれる人も、一緒に滅びの道を歩んでくれる人もいない、絶対的な孤独の内に滅んでいくしかありません。

何故でしょうか？先程の六つの言葉の中の「乱暴な仕打ちを受け」という単語にヒントがあると思います。この単語、もともとは、「傲慢で高ぶった想いで、見当違いの事をする」「思い上がって、境界を侵犯する」という意味がある単語です。神を神とせず、自分達を神としてお互いを排斥し合いながら生きる傲慢な人間の思いが、結局は、その人自身を滅ぼすのだ、ここの聖書のみ言葉は、そう語っているようです。唯一、死を超える存在は、全知全能の神であり、命を生み出す創造主である神こそ、死に対抗する力があるのですが、その神に背を向けて無関係に生きようとするのが私達人間です。ですから、ここで、主イエス・キリストは、「救い主は、エルサレムで人間の滅びの死を死ぬのだ」と予告しているようです。

3 罪贖われた私達(本論Ⅱ)

何故なら、神は全く正しいお方ですから、私達人間の罪を見逃しにはできないからです。神を神としない傲慢な思いゆえに、私達は滅ばざるを得ないのです。しかし一方で、天の御神は深く強く人間を愛してくださり、人間の滅びが耐えられません。だからこそ、御神は多くの預言者を通じて、「私の所へと帰って来なさい、私を神として平安の内に生きなさい」と呼びかけ続けました。この預言者を通じて語られた神の徹底した正義と切なる愛が私達人間の間で実現したのが主イエスの十字架と復活です。だから、イエス様は、「人の子について預言者が書いたことはみな実現する。」と仰っています。この「実現

する」というのは、「成就する、完成する」という意味があります。つまり、主イエスは、神に背いて自分勝手に生き、孤独の内に滅びるしかない私達の代わりに、私達の死を死んでくださった、十字架上で、私達の滅びをその身に一身に受け、預言者を通じて語られていた神の愛と正義を成就してくださったのです。だからこそ、私達は孤独で悲惨な滅びをもう死なずにすみます。神からご覧になった私達人間の真実の姿とは、神の御子が命を投げ出し滅びから救い出してくださる一人一人です。

4 キリストと眼差しを経験する(本論Ⅲ)

しかし、「主イエスの十字架は、この私の罪を神さまに償うものである」という真実は、主の十字架が起こる前は十二人始め弟子達にも隠されていました。この真理は、他者から知らされて理解できるようなものではなく、主イエスの十字架を経験しなければ、分からない事なのだと思います。主の十字架を通じてこの真理に気づく様子は、十二弟子の筆頭であるペトロの姿を通して、福音書に書き残されています。少し先のルカ福音書22章に描かれている出来事です。主が十字架に架かる前日の最後の晩餐で、「主よ、ご一緒なら牢に入っても死んでもよいと思っています」と万座の人々の前で宣言します。主イエスはそれを聞いて、「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏がなく前に、わたしを三度知らないという」と静かに仰います。その数時間後、十二弟子の内の一人・イスカリオテのユダの裏切りにより、主イエスは、犯罪人のように後ろ手に縛られ逮捕され大祭司の屋敷に連行されます。ペトロは、ひそかにその後を追ひ大祭司の屋敷に入りこむ事に成功します。しかし、ペトロは屋敷の召使達に見つかり、「お前もあのイエスという男の仲間に違いない」と責め立てられます。その時、ペトロは、自分も主イエスと同じように逮捕される、殺されるという恐怖にパニックとなり、「私はあんな男とは知らない、関係ない！」と三度お繰り返して、完全に主イエスを否定するのです。その時、鶏が鳴きました。主イエスは振り返り、ペトロをご覧になります。主の瞳は、「お前も私を裏切るのか！呪われよ！」とペトロを責める気配は全くなく、深い憐みに満ちていました。ペトロの裏切りを赦し、ペトロの弱さをご自身の弱さとして負ってくださる、「私を裏切るあなたの為にも私は十字架にかかる」と語り掛けるような眼差しでした。人間にはできない神しかできない深く大きい愛がたたえられていたのだと思います。だからこそ、ペトロは、その主の瞳の内に映し出された、自分の本当の姿、罪深い自分の姿を目を背けずに見る事ができたのです。彼は屋敷の外に出て大声で泣いた、とルカは語ります。

このペトロの物語を、自分の物語として私達が受け止める時、今日の三回目の十字架と復活の予告の言葉を、天の御神が弟子達に隠しておいた理由の一端が分かるように思います。ペトロや弟子達が彼ら自身で、主の瞳に映

る真実の自分の姿、神を神とできない罪人なる自分の姿に気づき、尚、そのような自分の背きの罪をご自身の命をなげうって赦そうという十字架の主イエスに真実の意味で出会い、その憐みを知って、悔い改める、神の方に方向転換できるように、神さまはお考えになった、その為に、神は、十字架の出来事の前に、弟子達に対し予告の言葉の意味を隠しておかれたのだと思います。

更に、父なる神は、時を備えて、その事をはっきりと弟子達に知らせました。それが、「三日目に復活する」と主が仰った主の甦りの時です。永遠の滅びから甦られた主イエスと出会った時、ペトロはじめ弟子達は、主イエスこそ神の御子、と確信できたのでしょうか。甦りの主イエスから、直接、主の十字架の死によって、自分達の罪が赦され、死から解放され、永遠の命への道が開かれたと教えて頂きました。それは、弟子達だけではありません。神は、私達の為にも、十字架と復活の主との真実の出会いを用意してくださいます。主イエスは、2000年後の今も、様々な機会を通じて、自己中心的にしか生きる事の出来ない私達と出会い、私達の罪と十字架の贖いを示し、深い悔い改めへと導いてくださいます。そして、主の十字架は自分の救いの為であったと告白する者の内に、聖霊として住んでくださり、神に背いていた罪人達を神の子として造り変えてくださるのです。

5 終末の収穫(結び)

ですが、私達は、どのような道を通して神の子とされていくかを事前に知る事はできません。その点でも十二弟子と同じです。全て真実は後になってから判る事だと思います。先程、交読文で読み交わした詩編23に、その事が記されています。「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う」、私達の進む道、いつどのようになるかわからない、思いもかけぬ試練が襲った時、私達は苦しみ悩みます。もがきあがき、神にすがるようにして、み助けを求め祈り叫ぶでしょう。ですが、そのように神にすがって試練を耐える事が、私達を神の子として造り変えるのだと思います。神を神としていなかった者達が神の子となるのに、苦しむ事は当たり前なのですが、神のみ旨が隠され、もがくような日々はつらく苦しくあると思います。そうしてうめくようにしてやっとの思いで試練をくぐり抜けた時、私達は気づかされます。まさに試練の時も、神を見失ったと失望した時も、実は主の豊かな恵みと深い慈しみは、いつも自分と共にあり、自分を支えていた、と。まるで過去の出来事から、主の恵みと慈しみが自分を追いかけて来て呑み込んでいくような経験をする。そうして、自分が造り変えられている事に気付くのだと思います。そのような経験を重ねる事で、私達は、一生をかけて神の子として造り変えられるのだと思うのです。だからルターは、「試練は神の抱擁」と言ったのだと思います。

さて、教会の暦では、待降節前の日曜日、終末主日、今日は一年の終わりの日曜日であり、世の終わり、終末を想起する日曜日でもあります。併せて収穫感謝礼拝でもあります。それは、世界が終末を迎えた時に、神様がこの世界の実りを収穫されるという黙示録の預言から来ています。終末の世、神様が喜んで収穫される実りとは何でしょうか。それは、私達一人一人です。私達が聖霊なる主イエスと共に生きる神の子として、それぞれの歩みの中で行った愛の行い互いに愛し合う事を、父なる神さまは本当に喜ばれ、楽しみに心待ちにされているのです。天の父なる神さまは、今、この時も、私達が結ぶ実を、私達と共に喜びたいと、天国から身を乗り出してごらんになっています。まさに、天の父なるお方は、み神にしかできない最善の方法で導き、私達一人一人に豊かな実を結ばせてくださる。なんと幸いな事かと思います。命ある限り、父なる神を賛美し、父なる神のみもとで過ごしたいと願います。